

婚約破棄してきた強引御曹司に

なぜか溺愛されています

目次

婚約破棄してきた強引御曹司になぜか溺愛されています 5

番外編 Happy Wedding

267

婚約破棄してきた強引御曹司に

なぜか溺愛されています

1 拝啓、あしながおじさま

あしながおじさまへ

おじさま、こんにちは。

私は今、この文章をニューヨークの空港ラウンジで書いています。

早いもので、私がアメリカに来て四年、おじさまと知り合ってから既に六年近くの月日が経ったのですね――

そこまで文章を打ち込んだところで、白石雛子はパソコン画面から顔を上げた。

今日は快晴だ。窓際の丸テーブルの席からは、飛び立つ飛行機の様子がよく見える。

キラリと光って真っ青な空に消えていく機体を見送りながら、雛子はその先にある日本を思った。

――おじさま、やっとお会いできるんですね。

二十二歳、夏。ニューヨーク州マンハッタンにある大学での留学生生活を終え、これから日本に帰国する。

六年前、すべてを失い失意のどん底にいた雛子に希望を与え、支え続けてくれた大切な人、あ

しながおじさま”の秘書となり、彼に恩返しをするために。

平日午前中のセネターラウンジは、人がまばらでも静かだ。

雛子のようにパソコンに向かっていているもの、アルコールを飲んで寛いでいるもの。皆それぞれの方法で搭乗までの待ち時間を過ごしている。

ゆるくウェーブのかかった背中までの長さのブラウンヘアを、雛子は手で掻き上げた。

少女が好む着せ替え人形に似てるとよく言われるこの顔は、外国人の興味をひくのか、大学では男子学生からたびたび声をかけられていた。

いつも彼らとの壁になってくれていた親友が、『ヒナコはおひとりしてるから、日本に着くまでに誘拐されないようにね』と本気で心配していたけれど……

――ふふっ、そんな心配はないわよね。

なにしろ今いる場所は、ファーストクラス専用的高级ラウンジ。

不審人物は入れないので、搭乗までの待ち時間をゆったりと過ごしてられるはず……だった。

今のうちにおじさまへのメールを送ってしまおうと、パソコンに視線を戻したその時、カタンと向かい側の椅子に誰かが座った気配がする。

――えっ、混んでるわけでもないのに、どうして？

わざわざ相席をする必要もないのにと顔を上げた途端、雛子は目を見開き固まった。

「うそ……なんで？」

――どうしてこの人がここにいるの？

思わずワンピースの胸元をギュッと握り込む。その指先が震えているのが、自分でもわかった。

「ヒナ、久しぶり」

「朝哉……」

「まだ覚えてくれてたんだな。もしかしたら俺の顔なんて忘れられてるかもって思ってた」

くつきり二重に色素の薄い茶色い瞳、高い鼻梁と薄い唇。明るかった髪色は黒くなっているけれど、目の前にある怖いほど整った顔はあの頃のままで……

——忘れてなんかいない。忘れるはずがない。

だっこの人は……

黒瀬朝哉。六年前、婚約者だった自分をあつさりと捨てた男性。

かつて雛子が誰よりも愛し、今は誰よりも憎んでいる相手なのだから。

*

高校一年生だった十五歳の冬。雛子は医療機器メーカー『白石メディアカ』社長であった父、宗介のパートナーとして地元の経済人と医療関係者が集うパーティーに出席した。

雛子の母親は彼女が小学校五年生の時に乳癌で亡くなっている。宗介はその後も再婚せず、家政婦の助けを借りて、雛子と父娘二人での暮らしを続けていた。

これまで大抵のパーティーには宗介だけで参加していて、どうしてもパートナーが必要な場合は

秘書を伴っていたのだが、この年高校生になったことで、雛子は初めてパートナー役を仰せつかる。そこで当時二十歳の大学生だった、クインパスグループ御曹司の黒瀬朝哉と出会ったのだ。

モデルみたいな高身長に、やや光沢のある黒い細身のスーツをまとっている。ダークブラウンのメディアムヘアは毛先を無造作に跳ねさせているのがオシャレで、キラキラの笑顔が王子様みたい。

そんな彼は、実は自分は雛子の見合い相手だと言った。親の会社同士で業務提携の話が出ていて、お見合い後に婚約する手筈になっている。だけど雛子を気に入ったからお見合いをとぼして、すぐ付き合おう……と突然せまられたのだ。驚くに決まってる。

朝哉は強引で、そしてとても魅力的だった。

「確かに俺たちは今、知り合ったばかりだ。それでも俺はパーティーが始まってからずっと君を見ていて『いいな』って思ったし、話してみたらますます気に入った。これからもっと好きになると思う」

この美しい男性にそんなふうに言われて心が動かない女子がいるだろうか。

中高一貫の女子校育ちで父親以外の男性に免疫のない雛子が恋に落ちたのは、あつという間だった。

「朝哉さん……私もこれからあなたのことを好きになるような気がします。よろしくお願いします」

「ハハッ、これから……か。それじゃ、ちゃんと好きになってもらえるように頑張るよ」

こんなふうが始まった二人の恋は、とても順調だった。と、今でも雛子は思う。

朝哉は言葉や態度で惜しみなく愛情を伝えてくれたし、元々が親公認だから話が早い。

翌年三月三日の雛子の誕生日には、朝哉と両親が秘書を伴って白石家を訪れ、四月の朝哉の誕生日パーティーで婚約発表すると決めていた。

その時、両親を居間に残して二階の雛子の部屋に入った朝哉は、「本番はパーティーでだけど、俺の中ではもうヒナは婚約者だから」とスーツのポケットから小箱を取り出し、二カラットの指輪を雛子の薬指にそっとはめる。

雛子が左手をかざすと、窓から差し込む光を反射してキラキラと輝いた。

そして朝哉が優しく抱きしめキスしてくれて――

「正式に婚約したら……俺、ヒナを抱くよ」

「初心者なので……よろしくお願いします」

「俺も初心者だし」

「えっ、嘘っ！」

「本当。本番までに予習しておくよ。ふはっ、めっちゃ楽しみ」

明るいつ未来に思いを馳せていたこの瞬間が、雛子にとって最高で、そして最後の幸福な時間となる。

そんな雛子に悲劇が突然訪れた。

四月の大安吉日、朝哉の二十一歳の誕生祝いと婚約者となる雛子のお披露目を兼ねたパーティー

当日。その会場に、雛子は行かれなかった。

父、宗介が心筋梗塞で突然死したのだ。

まさしく天国から地獄。

そこから雛子を取り巻く環境が目まぐるしく変わる。悪いほうに。

まず、叔父の大介が宗介の跡を継いで白石メデイカの社長となり、雛子が住む世田谷の邸宅に家族揃って引っ越してきた。

白石メデイカの製造部門である白石工業を任されていた大介は、それまで工場のある埼玉県に住んでいたのだが、そちらの家は売りに出したという。

雛子の居場所は二階の自分の部屋だけで、他はすべて大介一家のものとなった。

宗介が使っていた主寝室を大介と妻の恭子が使い、書斎には大介の持ち込んだパソコンが置かれる。

半地下のオーディオルームが長男である大地の部屋で、一階のゲストルームが大地の妹の麗良の部屋だ。

麗良は雛子と同じ年だったが、当時雛子に通っていた中高一貫の女子高には編入できなかったらしく、寄付金が高いことで有名な別の私立高校に通うこととなった。

彼女は幼い頃から雛子をライバル視して嫌っているふしがあったものの、それでも従姉だ。同じ家に住んでいれば、いずれ姉妹が親友のようになるかも……と雛子は考えていた。だが、それは麗良の「あなたと朝哉様じゃつり合わない！ 彼は白石メデイカの令嬢と結婚したいんだから私の

ものなの！」という言葉で、早々に無理だと悟らされる。

長男の大地は通っていた大学を前年に中退したそう、今は何をしているのかよくわからない。食事の時には部屋から出てくるものの、それ以外は基本的に部屋にいるようだ。

時々オーディオルームから大音量で銃撃戦らしき音が聞こえてくるから、ゲームでもしているのかもしれない。

そんな彼は、「雛子ちゃんは可愛いね。ゲームをしたい時はいつでも言ってる。教えてあげるから」、「僕の部屋におやつが沢山あるよ。遊びにこない？」などと、誘ってくる。

雛子はゲームに興味がないし、朝哉以外の男性と二人きりになるのを避けて断っていたけれど、家の中で唯一好意的に話しかけてくれる彼のことは嫌いではなかった。

だが、それ以外は困ったことばかりだ。

彼らが引越してきた翌日からデパートの外商がひっきりなしに家を訪れ、派手な絵画や家具が次々と運び込まれてくる。

「私の下手くそな料理じゃ雛子さんのお口に合わないだろうから〜」

そう言ってから雛子がお世話になっていた通いの家政婦の木村さんに家事一切を丸投げしていた恭子は、目つきが気に入らないと彼女を辞めさせてしまったのだ。

「ううっ……雛子さんがこんな目に遭うなんて、宗介様もさぞかし無念でしょうに」

そう木村さんが泣いて悔しがってくれたけれど、どうしようもない。優しかった父はもういないのだ。

キッチンにはインスタント食品やスナック菓子が乱雑に置かれ、冷蔵庫には缶ビールが並ぶ。

徐々に荒れていく家の様子に心を痛めながらも、未成年の雛子にできることは「私にすべて任せとおけばいいからね」と言う大介と弁護士が出す書類に、次々とサインすることだけだった。

——仕方ない……わよね。

そんな叔父一家が引越してきて一週間後。雛子は叔父と叔母からリビングと呼ばれる。

父が愛用していた大理石のセンターテーブルには、パンフレットと契約書らしきものが置かれていた。

「雛子、実はね……」

チラチラと顔色をうかがうようにして口ごもる大介に痺れを切らしたのか、恭子がズイッとパンフレットを押し出す。

「あのね、雛子さん、あなたには学校の寮に入ってもらおうと思うの」

「えっ……」

「ほら、私たちと一緒にいたら気詰まりだろうし、寮のほうが気楽でしょ」

「でも、この家は……」

——お父さんとお母さんと暮らした大切な場所なのに。

「寮に入るのだからタダじゃないだし、手続きとか面倒なのよ。だけど、あなたのために思ってお金と労力をかけるって言ってるの。何か不満がある？」

強い口調で迫られて、何も言い返すことができない。

「……いいえ」

やっこのことで言葉を絞り出すと、雛子は揃えた足の上でギュッとスカートの布地を握りしめる。たった一週間で、どうしてこうなってしまったのか……

本当なら今頃、朝哉の婚約者として幸せを噛みしめているはずだった。

左手の薬指には指輪がきらめいているはずだった。

自分の向かい側には父親が座り、優しく微笑^{ほほえ}んでいるはずだった。

——お父さん、私、どうしたらいいの？

その問いに答えてくれる人は、もうここにはいない。

自分で決めるしかないのだ。

いや、もう答えは決まっている。十六歳の自分に逆らうすべはないのだから。

「……わかりました。寮に入ります」

雛子は目の前の契約書にサインをして恭子に渡す。

部屋に戻ろうと背を向けると、「部屋の荷物は綺麗に整理していつてね。あの部屋は麗良が使うから」と言われ、言葉も出なかった。

スーツケースと段ボール箱に荷物を詰め込みながら、沢山^{たくざん}の思い出が詰まった部屋に別れを告げる。

その後、雛子から入寮の件を知らされた朝哉は自分のことのように怒りをあらわにし、彼がその当時住んでいたマンションと一緒に住もうと言ってくれた。

ただど二人はまだ正式な婚約者ではなく、朝哉のマンションがある横浜から高校に通うのも難しい。

それに今の雛子の保護者は大介夫妻だ。彼らに行き先を告げないわけにはいかないだろう。そうになると、麗良の耳に入り、恋する朝哉と雛子が一緒に住むなど、反対するに決まっている。

『——そうか、ヒナが高校を卒業するまでのしんぼうだな。寮に行く日が決まったら教えて。俺が手伝うから』

電話口でそう言ってくれた朝哉だったが、実際に引越しを手伝ってもらうことはできなかった。予定よりも早く雛子が寮に入ってしまったから。

忌引き^{きび}が明けて学校に行った雛子は、授業が終わると同時に寮長に呼び止められ、そのまま寮に案内されてしまう。

部屋には既に自宅の部屋から運びだされた段ボール箱とスーツケースが置かれていた。

悲しいとか悔しいとかよりも驚きのほうが大きくて、雛子は泣くことさえ忘れて立ち尽くす。

愕然^{がくぜん}としたものの、しばらくして、あのままあの家にいるよりはこうなってよかったのかも……と考え直し、前向きに頑張ろうと決めた。

——大丈夫。高校を卒業すれば、朝哉がここから連れ出してくれるんだから……

そうして、週末の短い自由時間に外出し朝哉と束の間のデートを重ねる。それだけが雛子の唯一の楽しみとなった。

朝哉も忙しい合間をぬい、ほんの数時間会うためだけに横浜から車を走らせてくれる。

そんな形で交際が続いていたある日。

『ヒナ、話があるんだ、明日会えないか？』

そう電話で呼び出された。

「もちろん！ 会いたい」

八月最初の土曜日。朝哉の言葉に雛子は顔を輝かせる。

暑さのピークが近づくとつれて、朝哉と会えない日が増えていたのだ。

『ごめん、大学の勉強が忙しくてさ』

『悪いんだけど、父さんと約束があるんだ』

『来週も無理っばい。ごめんな』

そんな台詞ばかり聞いていた。

たまに会いに来てても一時間ほど近所でお茶をするだけだったり、スーツ姿で現れて雛子の顔を見るだけで二分で帰っていったり。

それでも会えば強く抱きしめてくれるし、別れ際には熱いキスをして離れがたそうに門の向こう側からずっと手を振ってくれる。

忙しいのに会いにきてくれるだけでも嬉しいと思わなきゃ……そう思いながらも寂しさを感じていたのだ。

だから予想外に恋人に会えることになって、雛子は胸をワクワクさせながら朝を迎えた。

車で迎えにきた朝哉は、ネイビーのサマーสูツに白いVネックシャツを合わせたセミフォー

マル。

一方、雛子が着たのはウエストをリボンで絞った濃紺のシフォンドレスだった。そう、初めて朝哉と出会ったパーティーで着ていたものだ。

あのパーティー以来着る機会がなかったが、今日は朝哉にリクエストされたため、クローゼットから引っ張り出した。

——わざわざ色を合わせたセミフォーマルってことは、それなりにお洒落しゃれなお店に行くのかな？ そんな予想をしている雛子に乗せた車が停まったのは、高級ホテルの地下駐車場だ。朝哉に聞くまでもなく、どこなのかすぐに気づく。

「ここってあのホテル!？」

「うん、そう……行こう」

そこは二人が出会ったパーティー会場がある思い出のホテル、その最上階のラウンジでアフタヌーンティーをしようと誘われる。

——だからこのドレスを指定したのね。

雛子が三段スタンドに載ったサンドイッチやスコーン、デザートを充分堪能たんのうすると、朝哉が真剣な表情で、テーブルの上にカードキーを置いた。

「ヒナ、これはこのホテルのゲストルームのカードキー」

「えっ?」

「このホテルにクインパスが年間契約でおさえてる接待用の部屋があつて、そこを今すぐ使える状

態にでもらっている」

——それって……

テーブルの上でギョツと手を握られて理解する。これから二人でその部屋に行きたいと誘われているのだと。

心臓が大きな音を立て、全身がカッと熱くなる。

だけど、まったく悩まなかった。

「うん……いいよ」

照れながらうなずくと、「行こう」と手を引かれ、雛子はラウンジをあとにする。

そして二人は無言で足を進めた。

エレベーターを降りた後は、足元がフワフワしているようで、雛子はこの状況に現実味を感じない。それでも自分の手を引く朝哉の手の熱と力強さは確かにここにあって……

夢ではないんだと確かめるように汗ばんだ手のひらを握り返すと、こちらを見下ろす朝哉と目が合う。その瞳は心なしか潤んでいる。

——きつと朝哉も緊張しているんだわ……

連れていかれた高層階にある二間続きの部屋は、奥が寝室になっていた。朝哉は景色を見ることもなくすぐにカーテンを閉め、雛子を抱き寄せる。

「ヒナ……」

息ができないほどの力強さ。容赦ない締め付けに腕の骨が折れるんじゃないかと心配になる。す

ると、「ごめん」と力を抜いて、朝哉はバスルームに入ってしまった。

——ビックリした……でも、余裕がないのは私だけじゃなくて朝哉も同じなのね……

『正式に婚約したら……俺、ヒナを抱くよ』

朝哉にそう言われた十六歳の誕生日、あの日から覚悟はできていた。

本来なら四月には婚約者になっていたはずなのだ。ううん、朝哉はもう婚約者だと言ってくれている。

「だから怖くない、嬉しいだけ……」

カーテンの間隙から外を覗くと、眼下には太陽の光でキラキラ輝くビルの群れと、ありんこみたいな車の列。

——この日の景色を目に焼きつけておこう。今日は大好きな人と結ばれる大切な記念日になるのだから……

バスローブを身にまとった朝哉と入れかわりでそそくさとバスルームに入った雛子は、いつもより入念に身体を洗う。

不安と期待と緊張と……さまざまな感情が胸に渦巻いていても、確かなものがある。『嫌だ』という気持ち、ほんのひとつかけらもないということ。

あらためて自分の気持ちを確認したところで、雛子は「うん」とうなずきシャワーを止める。何を着ればよいのか迷い、朝哉を真似てバスローブ一枚だけを身につけた。

「ヒナ、おいで」

ベッドサイドに腰掛けている朝哉に近づくと、彼が立ち上がり抱き上げてくれる。そのままベッドに横たえられた。

彼は雛子に覆いかぶさり茶色い瞳で見下ろしながら、その長い指で雛子の髪を、頬を、顔のパーツすべてを丁寧になぞる。まるで雛子の顔の輪郭を覚え込もうとするかのようにその行為を繰り返した後、ゆっくりと顔を近づけてきた。

すぐに唇が重なり、生温かい舌が口内を蹂躪する。

今までにキスは何度もしてきた。けれどこの先は未知の世界で……

チュッとリップ音がして唇が離れたかと思うと、そのまま耳たぶを甘噛みされ、舌が耳に入ってくる。粘着質な音と生温かい吐息が鼓膜を伝い、全身を震わせた。

朝哉の右手が雛子のバスローブをはだけさせ、肩を通過して胸のふくらみに触れる。

「あっ……」

思わず鼻にかかったような声を出してしまった。恥ずかしさに、雛子が閉じていた目をうつすらと開けると……朝哉が固まっている。

「朝哉？ ごめんなさい、ちょっと恥ずかしかっただけ。大丈夫だから……」

「……ごめん」

「えっ？」

彼はゆっくりと身体を起こし、眉間に皺を寄せて自分の前髪を掻き上げた。

「ごめん……血迷った」

——えっ、血迷った!?

意味がわからないまま、雛子も身体を起こして向かい合う。

「朝哉、どうしたの？」

朝哉はそれに答えず、無言で雛子を抱きしめた。

「朝哉？」

「ヒナ……好きだよ」

「うん、私も朝哉が好き、大好き」

その後、彼は何度もキスをしてきつく抱きしめてくれたものの、結局その先に進むことはない。

——朝哉は私のために我慢してくれたんだわ。婚約したら、その時はきつと……

気づけばもう帰寮時間が迫っている。

離れがたくて、雛子がなかなかベッドから下りずにいると、朝哉がドレスを持ってきて着替えさせてくれた。

その手がとても優しく、それだけでも満足だと思える。

だが、帰りの運転中、朝哉はいつになく無言だった。思いつめたようなその横顔を眺めながら、雛子は彼も寂しいと思ってくれているのかな……と考える。

「朝哉、来週は会えそう？」

「……ヒナ、着いたよ。バッグを忘れないようにね」

「……うん」

先に車を降りた朝哉がいつものようにドアを開け、手を引いて降ろしてくれる。なぜか彼の指先は冷たくなっていった。

雛子同様、外出時間ギリギリで帰ってきた生徒が寮の門の内側に駆け込んでいく。

「ほら、ヒナも行かなきゃ」

「うん、でも……」

何がどうとはハッキリわからない。だけど目の前の朝哉に違和感を覚えた雛子は、このまま行つてはいけないと思つた。

「もう時間だ。早く行つて」

残り三分。早く建物の中に入り、寮母さんに帰寮の報告をしなくては。

後ろ髪を引かれる思いで門の内側に入り、振り返つたその時――

「ヒナ……」

門の向こう側から名前を呼んだ彼が、信じられない一言を発する。

「ごめん、婚約を解消させてほしい」

――えっ？

最初は聞き間違いだと思つた。

そう思いながらも、さつきから感じていた違和感の正体が判明した気がして、雛子の心臓が嫌な音を立て始める。

「朝哉、何を言つて……」

彼のもとに戻ろうと一歩門に近づいた瞬間、もう一度ハッキリと耳に飛び込んでくる。

「ごめん、婚約はなかったことにして」

それはまるで、いつもの『じゃあまたね』と同じ口調で。

「冗談……？」

「本気だよ。婚約を解消したい……いや、解消する」

提案でもお願いでもなく『断言』だ。

震える足をもう一歩前に出したところで、雛子はそこから先に進めなくなった。

こちらを見つめる彼の瞳が、真剣だったから。

――うそ、どうして？

だって、今日は朝からデートして、思い出のホテルで過ごして……

そこでヒュッと息をのむ。

――最後の思い出づくり!?

瞳を大きく見開いて茫然としてみると、朝哉が口角を上げて語り出した。

「俺、クインパスを継ぐことにした」

――自分は会社を継がない、お兄さんに任せるつて言つていたのに？

「大学生活も折り返し地点になつてさ、あらためて自分の将来を考えてみたんだ」

どうせなら人に使われるよりもトップになりたい。

会社を継げば嫌でも注目されるし、行動が制限される。なかなか羽目がはずせなくなるから、今

のうちに遊んでおきたい。いろんなことを経験しておきたいし、もっと広い世界を見てみたい。

彼はそうスラスラと語った。

「だから、二、三年海外をブラついて見識を広めるのもいいかな……って思ってたさ」

「海外……に、行っちゃうの？」

朝哉は笑顔で「うん、まだ行き先は決めてないんだけど……」と、うなずく。

「日本での思い出づくりはできたから、今度は留学という名の自由時間で思い出づくり？ かな」

「私は置いてかれちゃうの？」

「置いていくっていうか……連れていくって選択肢は、最初からないから」

ハハッと笑いながら言われて、心臓が凍りつく。

この人は何を言っているのだろう。

目の前にいる彼は、全然知らない人のようだ。

——朝哉は初恋の人で恋人で、私の婚約者で……

「ごめんな、婚約ごっこは今日で終わりだ」

「……ごっこ？ 朝哉はずっと婚約ごっこをしてたつもりだったの？」

彼が困ったように肩をすくめる。

「ピナは可愛いし一緒にいて楽しかったから、結婚してもいいかなって思ってたよ。結納を交わしてたらそうなってたかもしれないけど……実際はそうならなかった。だから、しょうがない」

——結婚してもいいかなって……

「ピナと付き合ったことは後悔してないよ。素敵な思い出ができた、ありがとう」
返す言葉が浮かばない。

雛子が恋愛だと思っていた日々は、朝哉にとっては思い出づくりの一環だった。

——今日のこと……

ホテルの部屋に行ったのは、彼にとつてはただの興味本位、留学前のお遊びで。

だから『血迷った』……なのか。

我にかえて寸止めできるなど、随分冷静な判断だ。

——私は必死だったんだけどな。本当にそうなるっていいって……

今聞いた言葉を脳内で反芻はんすうしているうちに、身体が震え出す。

思わず両手で耳を塞ふさいだ。もうなんの言葉も入ってこない。

「ピナ……本当にごめんな」

最後に彼の唇がそう動いたような気がしたけれど……もう見えなかった。

茫然ぼうぜんと立ち尽くす雛子に「じゃあね」と右手を上げて、朝哉はさつきまで乗っていた愛車で去っ

ていく。

それが朝哉と雛子の別れだ。

しばらくその場から動くことができなくて、ようやく雛子が寮に戻ったのは帰寮予定時間を二十分も過ぎてから。

罰として一ヶ月間の外出禁止になったけれど、特に問題なかった。

だって週末に出掛ける予定も楽しみも、もうなくなってしまったのだ。

こうして初恋は、唯一残された未来への希望とともに、あつけなく砕け散ったのだった。

その後、傷心の雛子に追い討ちをかけるように、衝撃的なニュースがもたらされる。

クインパズグループによる白石メデイカの買収、そして大介の社長解任だ。

以前聞いていた計画では、平等な業務提携だったはず。その関係を強固にするための朝哉と雛子の婚約話ではなかったのか。

——ああ、そういうこと……

雛子は裏切られたのだと悟る。

最初からそのつもりだったのか、それとも宗介の死によって流れが変わったのかはわからない。

いずれにせよ、朝哉はこうなることを知っていたに違いない。

元々が業務提携のために仕組まれた出会いだ。

雛子が社長の娘ではなくなり、白石メデイカの買収が決まったことで、朝哉にとって自分が必要のない人間になったのだろう。

その直後、ちよつとした事件を起こして、大介一家が失踪した。

雛子は十六歳にして無一文で放り出されたのだ。

しかし幸いなことに、数日後に『あしなが雛の会』なる団体から奨学金給付の声がかかる。

なんでも、『あしなが雛の会』は日本の未来を担う優秀な若者を支援することを目的としていて、

日本国内の高校生の中から独自の調査方法で給付対象者を選び援助している民間の非営利団体だと

いう。

だが、雛子がインターネットで調べても、その団体についての情報はわからなかった。校長から聞いた内容がすべてだ。

得体が知れず心配ではあるものの、授業料と寮費の全額負担に加え、学用品購入費として月々十万円が支給されるのはありがたい。

学校を辞めて寮を出なくてはいけないと思っていた雛子には、断る理由がなかった。

校長から差し出された書類に、その場ですぐにサインする。

——よかった……高校を辞めなくていいんだわ。

とりあえずこれで寮に残れる。

高校を卒業後は仕事を見つけて働こう。

今まで働いたことはないけれど、何か一つくらいはできる仕事があるはずだ。

そう思うと少しだけ気持ちが悪くなる。

それに、すべてを失ってどん底にいたけれど、そんな自分にもちゃんと光が射してくれた。

努力は報われる。何も言わなくてもちゃんと手を差し伸べてくれている人がいる、それが嬉しい。

雛子は校長の許可を得て、団体宛にお礼状を書くことにした。

あしなが雛の会 御中

拝啓残暑の候、貴会ますます清栄のこととお喜び申し上げます。

このたびはあしなが雛の会の奨学生に選んでいただき、誠にありがとうございました。私事ですが、学校を辞め、退寮もやむを得ないという窮状きゆうじょうに陥おちいつていたので、貴会の奨学金のお話をいただいた時は、天にも昇る気持ちでした。大袈裟おおげさではなく、本当にそう思ったのです。

奨学金のお陰で続けられる学校生活です。これから残り一年半の高校生活は、今まで以上にやり一層勉強に励み、高校卒業後は社会人として貴会のように世の中に貢献できるように精進する所存です。

今後もしも温かい目で見守っていただければ幸いです。どうかよろしくお願い申し上げます。末筆ながら貴会の一層のご発展をお祈り申し上げます。

敬具 白石雛子

すると、すぐに返事が来た。書いてくれたのは、『あしなが雛の会』の会長だそうだ。

白石雛子様

丁寧な手紙をありがとうございます。

奨学金があなたの役に立っているようで何よりです。

あしなが雛の会の給付金は、あなたのように真面目で勉強熱心な学生に使われるべきだと思っております。

おおいに学生生活を満喫まんきつしてください。

ところで、あなたからの手紙を読んで気づいたことがあります。

あなたは白石メデイカのご息女だったんですね。

実は、私はあなたの亡くなったお父上、宗介氏と旧知の間柄でした。

それで返事を書かせていただくことにしたのです。

私が長らく海外に行っていたこともあり、近年はなかなか会えずにいた間に宗介氏が亡くなり、彼のご家族の状況が大きく変わっていたと知り驚いています。

そこで雛子さん、会の奨学金とは別として、私個人としてもあなたの支援をさせてもらえないだろうか。

宗介氏には大きな恩義があったのに、それを返す機会を永遠に失ってしまった。

せめてあなたを通じて恩返しをさせてほしい。それは迷惑だろうか。

私は孤独な独り身で、資産を譲る相手もない。

あなたのような優秀な人を支援させてもらえるのは有益だし、若者の役に立っていると思えば仕事にもより一層励める気がします。

その代わりといつてはなんだが、たまにこうして手紙をください。孤独な男に生きる希望を与えてほしいのです。いくなれば『あしながおじさん』のジャービスや『マイ・フェア・レディ』のヒギンズ教授の役回りをさせてほしいということです。

それと、あなたはまだ高校生なのだから、無理に堅苦しい文章を書く必要はないと思う。

次からは若者らしい素直な言葉を使い、メールでも構わないので、気軽に近況を知らせてもらえ
るとうれしい。楽しみにしています。

どうか体に気をつけて。

あしなが雛の会 会長

——会長さんから返事をいただきました！

喜んだ雛子は、今度は同封のカードに記されていたアドレスにメールを送った。

あしながおじさま

こんにちは。

あしながおじさま……と勝手に呼んでしまいました。構わないでしょうか？

名前を覚えていただけなかったので、どういう呼び方がいいかと考えてみたのです。

「会長様」も「会長さん」もすぐく他人行儀な気がしてしっくりこなかった。おじさまからの
手紙をヒントにしました。

おじさま、お言葉に甘え、おじさまからの支援をありがたくお受けいたします。

おじさまは孤独だとおっしゃいましたが、私も孤独です。

ですが、お互いの存在が支えになれるのであれば、今この瞬間から私たちは孤独ではありません、
二人です。

もうこれからは寂しくなんかありませんね。

私は『あしながおじさま』のジューディほどのユーモアや行動力もないし、『マイ・フェア・レ
ディ』のイライザみたいに期待通りの淑女になれるかも怪しいです。

それでも、ご期待に添えるよう努力を続けるとお約束します。

おじさま、私を見つけてくださり、ありがとうございます。そして父のことを偲んでくださり、
ありがとうございます。

また日々の報告をさせていただきますね。

お忙しくて迷惑な時は遠慮なくそうおっしゃってください。

そうじゃないと私は調子に乗って、しょっちゅうメール攻めにしてしまいそうです。
それではまた。

雛子

P.S. 実を言うと、最初からおじさまの会には運命を感じていました。私は「あしながおじさ
ん」のお話が大好きです。会の名前には私の名前が一字入っているんですから。

こうして彼の支援を受け、結局、雛子は大学まで卒業することができた。

その間、一度もおじさまと会うことはなく——

照明の落とされた飛行機の座席。

雛子がハッと目をさますと、目の前のテーブルで開かれたままのパソコン画面がぼんやりと光っていた。

おじさまに送った文章をもう一度読み返しているうちに、うとうととしていたらしい。肩や腰に痛みがないのは、シートがよいからだろう。

生まれて初めてのファーストクラスは、想像以上に豪華だ。

ウッディな色調で揃えた落ち着いた空間は、ビジネスクラスの倍ほどの広さ。シャンパンやキャビアは欲しいだけ提供され、寝る時には C A にベッドメイキングをしてもらい、足を伸ばして寝られる。

——今回、おじさまが私のためにファーストクラスを取ってくれたと知った時には驚いたな。

きつと帰国祝いに奮発してくれたのだらう。こんな経験はもう二度とできないかもしれない。雛子はおじさまがせっかくプレゼントしてくれた至れり尽くせりの環境を堪能し、十四時間の飛行機の旅を快適に過ごさせてもらおうと思っていた。なのに……

今、雛子の左隣、細い通路を挟んだすぐそのシートには、なぜか朝哉が座っている。

空港のラウンジで会った時には、たまたまだろうと無視をした。

けれど、搭乗口前で隣に立って表示を見上げた横顔に、もしや……と胸騒ぎがし、彼が乗務員に頭を下げられながら最初にボーディング・ブリッジを渡った瞬間に確定する。

——この人、同じ日本行きの飛行機に乗るんだわ！

それだけでも衝撃なのに、まさか座席まで隣り合わせだなんて、なんとという運命の悪戯。

こうして、快適なはずの空の旅が一気に憂鬱な時間に様変わりしていた。

通路の反対側にそっと顔を向けてみると、なんと朝哉もこちらを見ている。雛子は慌てて顔を戻す。

「なあ、ヒナ……」

「名前で呼ばないでもらえますか」

「あかさ——」

「今から寝るので話しかけないでください」

一体どういうつもりなんだろう。

自分が捨てた女に平気で話しかけてくる無神経さに腹が立つ。

そして、久しぶりの再会に一方的に動揺している自分もつと腹立たしい。あまりにも惨めだ。

——こんな人に振り回されたくない。

雛子は覚悟を決めると、なおもチラチラこちらを見ている彼と、何年かぶりに真つすぐ目を合わせる。

「朝哉……うん、黒瀬さん、あの時は確かに辛かったし、あなたのことを憎みもしました。ですが私はもう大丈夫なので、気にしていただくかなくて結構です」

「ヒナ、俺は……」

雛子は朝哉の言葉を遮り、キツパリと告げる。

「私には今、大切な人がいるんです」

「えっ……」

「私には素敵な『あしながおじさま』がいるの」

そう、雛子は彼がいたから生きてこられた。彼のおかげで前を向いて進むことができた。

その恩に報いたいし、これからはその人のために生きていきたい。

だからこそ、おじさまのすすめに従って留学までしたのだ。

「ですからもう、私には構わないでください」

まだ何か言いたそうにしている朝哉の顔からツンと顔を背けると、雛子は毛布を肩まで上げて通路に背を向けた。

「——えっ、嘘っ！」

雛子におじさまからのメールが届いたのは、バゲージクレームでスーツケースを待っている時だった。

この後おじさまに会い、社宅に案内してもらったうえで仕事についての説明を受ける予定だった

のだが、彼が空港に来られなくなったというのだ。

ようやくおじさまに会えるとワクワクしていた気持ちが一瞬でシュンと萎み、代わりに不安が押し寄せる。

——知人を代わりに行かせると書いてあるけど……代わりって誰？

詳しいことは、メールには何も書かれていない。

顔も名前も知らないのに会えるだろうか。もしかしたら相手はこちらの顔を知っている？ おじさまが先方に写真を送ってくれているのかも。

一人でグルグル考えているところに、自分のスーツケースがターンテーブルを流れてくるのが見えた。雛子が一歩前に出て身構えた瞬間、目の前に大きな背中が立ち塞がる。

——えっ？

朝哉だ。

彼は雛子のワインカラーのスーツケースを軽々と持ち上げるとシルバーのカートにひよいと載せ、次いで自分のスーツケースも当然のように同じカートに載せた。

「スーツケースはこれだけ？」

「とも……黒瀬さん、ちょっと、何してるの？」

「朝哉でいい。……一緒に行くぞ」

「はあ？」

朝哉は頭を掻きながら困ったように俯いて、チラッと上目遣いで見つめてくる。

「あのさ……ヒナって、『あしながおじさま』と約束してたんだろ？」
「ちよっ……どうしてそれを!?」

「その人って、あしなが雛の会の会長だろ。彼からメールが来た。仕事のトラブルで急遽アメリカに行くことになったから、しばらくの間、代わりを頼むって。今日から俺がヒナの面倒を見る」
「ええっ!? そんなの困ります! 絶対に嫌!」

雛子が即答すると、朝哉はひどく傷ついたような顔をした。
一瞬泣きそうにも見えただけ、それは見間違いだっただけ。すぐに片方の口角をニツと吊り上げて、「それじゃ、どこに行くんだよ。全部彼に任せてあったんじゃないの? そう聞いているよ」とカートを押して歩き出す。

「えっ、ちよつと待って!」
「ほら、貸して!」

彼は雛子の手からキャリーケースを奪ってスーツケースの上にボンと載せ、ついでに自分の手を雛子の頭にボンと乗せた。

「車の中で説明するから、とりあえずついてきてよ。なっ?」

「あっ……」
「フワッと柔らかく微笑まれ、雛子は胸が締め付けられた。」

覚えている。朝哉はアーモンド型の目を細めると、ちよつとだけ幼く見えるのだ。
顔があまりにも整いすぎているせいで冷たく見られがちな彼は、目が三日月みだいになった途端、

グンと甘く優しい雰囲気が変わる。

雛子はその笑顔が大好きだった。

「ああ、やつぱり好きだな……この笑顔。」

そんなふうにはんやりしていると、「ヒナ、大丈夫か?」と顔をのぞき込まれていた。そこでハッとすする。

「やだ、私ったら今何を……」

「やだ、ダメッ!」

両手で顔を覆ってブンブンと首を横に振っているうちに、朝哉は雛子の頭から手をどけた。

「ごめん! 俺に触られたら嫌だよな。つい昔みたいに馴れ馴れしくして……ほんとゴメン。悪かった」

「今度こそ本当に朝哉が切なげな顔になる。」

彼は行き場をなくした右手で前髪を掻き上げ、眉尻を下げて黙り込んだ。

「違う、私は……」

「朝哉は勘違いしている。」

頭に手を置かれたのが嫌だったんじゃない。懐かしい手のぬくもりにときめいている自分が嫌だっただけだ。

「……だって、もう期待なんてしたくない。あんな苦しい想いは二度としたくないから……」
「……ううん、なんでもない」

妙に速くなる鼓動と戸惑いを胸の奥にグツと押し込めて、雛子はカートを押す朝哉に並んで歩き出した。

空港から外に出ると、停車中の黒塗りのセダンの前に見知った女性が立っている。

——ん？ ヨーコさん？

雛子は彼女を知っていた。その女性——ヨーコは、大学の寮でルームメイトだったグレイスの従姉だ。アメリカ人と日本人のハーフで、雛子の英語の個人レッスンをしてくれていた。

確か、クインパスのニューヨーク営業所で働いており、この春から日本のクインパス本社に転勤していたはずだ。

そこまで考えて、ああそうか、と合点がいく。

ヨーコは日本の新しいボスの秘書として働くと言っていた。

——ということでは……

なんと偶然。朝哉がヨーコの新しいボスなんだ……そう雛子が気づくのと同時に、ヨーコがカツカツとヒールの音をさせて近づいてくる。

「センム、白石サマ、お帰りなさいませ」

「……ヨーコ、こちらは白石雛子さん。先ほど伝えた通り、私がしばらくお世話をさせていただきますことになった。懇意にしている人からお預かりした大切な方だから、よろしくお願います」

「……はい、承っておりますわ」

「ヒナ、彼女は俺の秘書を務めてくれているヨーコ・オダ・ホワイトさんだ。君の世話はすべて任

せてあるから、困ったことがあれば彼女に頼めばいい」

雛子はそれを聞いて少し安心した。そして、遠慮がちに口を開く。

「よかった……黒瀬さん、実はこちらのヨーコさんと私は知り合いです。彼女が黒瀬さんの秘書になっていたとは知りませんでしたけれど……」

そう伝えると、ヨーコが朝哉に恐ろしく冷たい視線を向けたような気がした。けれど、それは一瞬。彼女はすぐに上品な笑みを浮かべ、「そうそうセンム、言い忘れておりましたワ」と言う。

「実はそうなのデス。ワタシとヒナコさんはアメリカで知り合ったオトモダチなのデス」

「あっ……ああ、そうだったのか。だったら堅苦しい挨拶は必要ないな。俺を気にせず、これまで通りに接してくれ」

「……アリガトウゴザイマス。ヒナコ、スツケースをこちらへドウゾ」

「あっ……はい。ありがとうございます」

ヨーコの合図で車から出てきた運転手らしい若い男性が、トランクに二人分のスツケースを丁寧に寝かせた。

助手席にヨーコ、後部座席に朝哉と雛子が座る。

車内では朝哉もヨーコも異様に無口になった。最初に口を開いたのは沈黙に堪りかねた雛子だ。

「あの……私がお世話になってるおじさまは、黒瀬さんとどういう関係なの？」

そう聞いてはみたものの、雛子の中には一つの考えが浮かんでいる。

——あしながおじさまは、もしかしたら朝哉のお父様の黒瀬時宗さん、もしくは祖父の定治さん

なのではないかしら……

そうであれば、朝哉がおじさまの代理で現れたことも納得できる。

いくら亡き父を知っていて、成績優秀者に資金援助をする活動をしているといっても、これまであしながおじさまが雛子に与えてくれた援助は、すぎるほどだ。高校を卒業させてもらったばかりか、留学までさせてくれた。

黒瀬家が雛子にしたことへの罪悪感からの援助の申し入れだったと考えれば、すべての辻褄^{つじま}が合う。

——要は慰謝料代わり、黒瀬家に悪評が立たないために予防線を張った……とか？

そんな雛子の心中を察したように、朝哉が『あしながおじさま』との関係を語り始めた。

「彼——君の『あしながおじさん』が、とある資産家の男性だというのは、知っているよね。俺とは会社のパーティーで知り合って以来の付き合いだ。ヒナと俺とは年齢が近いし、俺もアメリカ帰りなんで話が合うだろうと考えたみたいで。俺たちが元婚約者とは知らずにくつつけようとも思ったのかもな」

ハハッと乾いた笑いを漏らした彼の横顔を見上げて、雛子の心が冷えていく。

——何がそんなにおかしいの？

この人にとってあの出来事は、笑い飛ばしてしまえる程度の軽いものだったのだろうか。

——きつとそうだったんでしょね。あなたにとっては。

しばらくして、車はタワーマンションの地下駐車場に滑り込んだ。

見上げればめまいがするような高さの高級マンションだ。

雛子には分不相応なのに、朝哉は変だと感じないらしい。彼はきつと似たようなマンションに住んでいるのだろう。

朝哉はヨーコそっちのりで、雛子のために用意されていたという部屋を嬉々として案内する。そして、連絡に必要だからと電話番号の交換をさせられた。

「いつでも連絡して。今夜は一緒に食事に行こう。後で迎えに来る」

帰りにサラッとそう言われ、彼にとってあの出来事は、もう悩む価値もない、とつくに過ぎ去った思い出になっているのだと思える。いつまでもこだわってちゃ

いけないわよね。——私だっであしながおじさまに救われて前に進んでいるんだもの。いつまでもこだわってちゃ

どうせ朝哉とは、あしながおじさまが帰ってくるまでの付き合い。その間はただの知り合いとして接すればいい。そう考えたらいくぶん気持ちが軽くなった。

「わかりました。夕食を一緒にします」

玄関で朝哉たちを見送り、雛子はこれから自分が住むことになる部屋をあらためて見渡す。

ベランダ付き2LDKの角部屋。寝室のウォークイン・クローゼットを開けると、二畳ほどのスペースにハイブランドの洋服や小物がずらりと並べられていた。

おじさまは魔法使いなのかもしれない。

雛子はスーツケースから濃紺のシフォンドレスを取り出しじつと見つめる。

このドレスはどうしても手放せなくて、アメリカに行く時も持っていったものだ。今日の夕食にそれを着ていこうかと考えて、苦笑した。

——馬鹿ね、今さらこれを着たって……

ドレスをハンガーにかけると、一番奥に吊るしてクローゼットを出る。

「とりあえずおじさまにお礼のメールをしなくちゃ」

その後、アンティーク調の白いデスクでパソコンを開いて、おじさまへの感謝の言葉を打ち込んでいった。

おじさまはこのメールをどこで読むのだろう。仕事のトラブルということはきつと忙しいに違いない。この文章もすぐには読まれないかもしれない……

そんなことを考えながら窓を見る。外には濃淡のあるオレンジと黄色のグラデーションが広がっていて、いつもより近い空が、ここが地上二十五階なのだと教えてくれた。

——この同じ空の下どこかにおじさまがいる。

おじさまがどんな人で、どこでどんな仕事をしているかなんて、どうでもいいことなんだ。

雛子はあらためてそう思う。

たとえおじさまが世間から悪人と呼ばれるような人でも、その正体が悪魔だったとしても……自分にとっては命の恩人、一生を捧げると決めた、唯一無二の存在なのだから。

「きつといい人に決まっているけれど」

あんなに優しい文章を、思いやりのある言葉を書ける人が悪人なわけがない。

「もうすぐ……会えるわよね……」

こんなふうにあれこれ考えるのも、あと少し。

おじさまに会えば、雛子の予想が当たっているかどうかが判明するのだ。

——それまでは頭の中でおじさまの姿を想像して楽しもう……うん、そうしよう。

知らない間に自分の顔がほころんでいたことに気づき、雛子はあらためておじさまの癒しパワーに感動するのだった。

*

「——トモヤ、あなたはバカですか？ それでもオトコですか？ チ○コついていますか？」

都会のど真ん中にある、地上二十九階、地下一階のタワーマンション最上階では今、罵詈雑言が響きわたっていた。

ソファでうなだれている朝哉に仁王立ちで説教しているのは、ヨーコ・オダ・ホワイト、二十八歳だ。

つい先ほどまで雛子に優しく微笑みかけていたグラマラス美女と同一人物とは思えないほど、彼女は般若のような形相になっている。

朝哉は、専務として日本の本社に戻るにあたり、彼女をアメリカの営業所から引き抜いて自分の

秘書としていた。

しかし実を言うと、彼女は大学時代からの知り合いでもある。

朝哉は大学三年の時に雛子と別れてすぐ、先日まで彼女も通っていたニューヨークの大学に編入した。

ヨーコはその大学で朝哉の一学年上に在籍していて、いくつかのクラスで一緒にマーケティングや経営学を学んでいたのだ。

彼女は母親が日本人であるせい、日本の文化、とりわけサブカルチャーに愛情を注ぐ、大の日本好き。

だから大学を卒業し日本に帰国することになった朝哉は、クインパスに就職していたヨーコに、ある頼みごとをした。

『えっ、見張り役……デスカ？』

『そう、今年大学に入学してくる俺の元婚約者に近づいて、近況を報告してほしいんだ』

元婚約者の白石雛子を近くで見守り、日常の様子を逐一伝えてほしい。そしてできれば写真を撮って送ってもらいたい……そんな依頼に、最初、ヨーコは難色を示す。

『トモヤ、アメリカではそういう行為をストーキングというのですヨ』

『いや、日本でもそうだ』

『トモヤはヒナコのストーカーなのデスカ？』

『うーん、そうかもしれないけど、危害を加える気はないよ。ただ彼女の笑顔を見たい。彼女を近

くに感じただけなんだ』

そのために必要なお金はいとわない、ちゃんと報酬を支払うと言うと、ヨーコはお金は必要経費以外いらぬから、代わりに日本の漫画とお菓子を定期的に欲しいと頼んできた。

そうして、お互いの利害が一致した二人は、笑顔で握手を交わしたのだった。

あの日、雛子に別れを告げた朝哉だったが、本心から別れたかったわけではない。

とある事情から傍（そば）にいられなくなっただけで、それからずっと見守り続けていたのだ。

雛子に近づかせるためにヨーコがまず行なったのは、ちょうど同じ大学に入学予定だった自分の従妹（いとこ）を雛子に近づかせることだった。大学の寮で従妹にルームメイトの募集をさせ、そこから雛子とコンタクトをとって、同室にさせることに成功する。

ヨーコと同様に日本好きだった従妹はすぐに雛子を気に入り、ヨーコに言われるまでもなくあつという間に親友となつたらしい。

その上で、英会話のプライベートレッスンを受けたと言う雛子にヨーコを推薦し、彼女のアルバイトで週に一度のレッスンを始めたのだ。

こうしてヨーコはまんまと雛子と知り合うことに成功し、朝哉の想像以上にその距離を縮めていった。

加えて、『ヒナに近づくと男を徹底的に排除してくれ』という依頼も、あっさりと達成してくれた。なんと、雛子自身が誰とも付き合おうとしなかったのだ。

人形みたいにパッチリした瞳に愛らしい口元。華奢な身体つきに細くて長い手足の彼女は、朝哉

の予想通り、国籍問わず多くの男子生徒から声をかけられていたという。

「だけどヨーコや彼女の従妹に妨害させるまでもなく、本人がきっぱり振っていたらしい。」

『日本に彼氏でもいるの？』

「そう尋ねたヨーコに彼女はこう答えたそうだ。」

『もう恋なんてしたくないの。夢中になればなるほど、失った後の苦しみが大きいから』

「婚約者に裏切られた過去がある……と寂しげに微笑む雛子の表情が朝哉との別れの辛さを物語っていたと、のちにヨーコから覗かれた。」

「そんなふうには日本で過ごし、昨年、出世コースであるニューヨーク赴任となった朝哉は、一年間ヨーコと同じ営業所で働く。そして、とうとう専務として凱旋帰国を果たした。」

「その先発隊として先に日本に向かうことになったヨーコは、朝哉とのつながりを隠したまま雛子に別れを告げたと聞いている。」

『来年から日本のクインパス本社で新しいボスの下、秘書として働きマス。ヒナコも日本に帰るのでした。向こうでまた会いましょうネ』

『私はあしながおじさまの秘書になることが決まりました。一生懸命働いて彼に恩返しをします。』

「お互い働く場所は違うけれど、同じ秘書として、それぞれ頑張らしましょう』

「それが、ニューヨークで二人が交わした約束だという。」

「——どうして自分があしながおじさまだと言わなかったのデスカ！ 日本の空港でサプライズ！ と言いながら、ヒナコをハグするつもりだったのに！」

「本当に悪かった。俺だつて最初は嘘をつく気なんてなかったんだ。だけどヒナは俺を毛嫌いして塩対応で話にならないし……それに、あしながおじさまを心から慕っている」

「大好きなあしながおじさまの正体が心底憎んでいる男だったなど……そんなこと言えるわけがない。」

「そう、雛子の援助をしていた「あしながおじさま」は朝哉だった。」

「ニューヨークの空港でそれを打ち明け、日本に着いたら自分の秘書として働いてもらうつもりだったのだ。そしてあわよくば——」

「ところが、実際に雛子に会うと想像以上の拒絶に遭い、何も言えなくなりました。」

「それまでの交流で雛子を気に入っているヨーコは、あれからずっと朝哉の部屋で彼の弱気な態度を怒っている。」

「……ホントーにトモヤにはガツカリデスよ。ワタシの努力を無駄にした。おかげでヒナコとの友情がブチコロシじゃないデスカ！」

「ヨーコ、ブチコロシじゃなくてぶち壊しだ。それと、朝哉さんを呼び捨てするのはやめろ、彼はもう専務で俺たちのボスだ。あと、泣き真似ウザい」

「大好きなヒナコに嘘をついてしまった、人生終了だ、エーン！ ……と泣き真似をするヨーコへ横から冷静な突っ込みを入れているのは、専務補佐で運転手のタケこと青梅竹千代、二十四歳。」

「彼は朝哉の母方の再従弟で、幼い頃から年に一度会うかどうか程度の間柄だったのに、なぜか朝哉に心酔し、彼を慕ってクインパスに入社してきた。朝哉の父、時宗の下で一年間の修業を経て、」

昨年から朝哉の懐刀ふんどしとして働いている。

「タケ、ワタシはセンムと話してのではありませんヨ。今は親友のトモヤに説教してるんデス」
ヨーコに言われるまでもなく、朝哉自身が大いに反省していた。

日本に残っていた竹千代には、この一年で朝哉派の社員を増やすべく根回しをもらう傍ら、
雛子のためのマンシヨンの手配や秘書課への受け入れ準備をもらうっている。

そしてヨーコにも、朝哉より一足先の四月に先発隊として日本入りをしてもらうっていた。
竹千代と共に雛子の受け入れ体制を整えてもらうためであったが、女性の目で雛子のマンシヨンの
家具や電化製品のコーディネートしてもらったのが一番の理由だ。

恩人の会社で新入社員として働くつもりでいるだろう雛子はフォーマルな服を持っていないだろう
からと、ドレスもいくつか見繕みつくろってもらった。それらは雛子のマンシヨンのクローゼットに吊る
されて、今か今かと出番を待っているはずだ。

——ドレスの出番……あるのかな。

帰国前に竹千代とヨーコに言い放った自分の発言を思い出す。

『空港のラウンジでヒナにすべてを打ち明けて許してもらおうつもりだ』

『自分の気持ちを正直に伝えて再び婚約してもらおう。ヒナは俺の婚約者だと思って丁重に扱って
くれ』

『もしかしたら、ヒナはそのまま俺のマンシヨンに住むことになるかもしれない。その時はヒナ用
に準備したマンシヨンは賃貸にするかな』

などと夢心地で語っていた自分が恥ずかしい。思い出すだけで顔から火を噴きそうだ。

がっくりとうなだれていたその時、朝哉のスマホがピコン！ と鳴った。メールの着信音だ。

このプライベート用のアドレスにメールをしてくる人物はたった一人しかない。

朝哉は大喜びで文章を読む。

文面は、「あしながおじさま」から始まっていた。

——おじさま、私は今、マンシヨンの部屋でこのメールを書いています。

今回は素敵なお部屋を用意していただきありがとうございます。

こんなにもよくしていただいて、おじさまには感謝しかありません。

これからは私の一生をかけて恩返しをさせていたたくつもりです。

ただ、このお部屋は私には分不相応かと思えます。しばらくお世話になりますが、新しく部屋を
見つけようと考えています。

とところでおじさま、私は以前、一方的に婚約破棄をされたことを書きましたね。

私はそれをちゃんと乗り越えたつもりでしたが、実はまだ心の奥に深い傷として残っていた
みたいです。

久しぶりに彼と再会して、そのことに気づきました。

だけどおじさま、心配しないでください。私は決めました。

おじさまの下で働くのをいい機会だと思って、今度こそ過去の辛い出来事を忘れようと。

相手がもうすっかり過去のことにしているのに、私だけが同じところにとどまったままだなんて馬鹿らしいですね。

おじさま、今度こそ私は前に進みます、進みたいですよ。

新しい恋だつてしたいし、デートもしたい……などと言ったら、おじさまは『まだ仕事もできない半人前のくせに』ってあきれますか？

もちろん、まずは一人立ちが最優先です。

私が働いて自分の力でお金をいただけるようになったら、まず最初におじさまをデートに誘わせてくださいな。

お仕事大変だと思いますが、どうかご自愛ください。

雛子

PS. 今日はお迎えの人が違っていて、とても驚きました。おじさまに会えると思っていたので残念ですが、お仕事では仕方ありませんね。

帰国はいつ頃になるのでしょうか？ 早くお会いしたいです。首を長くして待っています——

読み終えた朝哉を衝撃が襲う。

「うわっ！」

突然大声を張り上げたものだから、キッチンでお茶を淹れていた竹千代が慌てて駆け戻ってきた。一方、ヨーコが朝哉の手元をのぞき込む。

「専務、どうされましたか！」

「トモヤ、何事ですか!？」

そんな二人を見上げ、朝哉は絶望的な顔で呟く。

「ヒナが……俺のことを忘れたって……新しい恋をしたって……」

もう終わりだ……と両手で頭を抱える姿に、竹千代とヨーコはあきれ顔になる。

「ヒナコからのメールですか。なんて書いてあったのデス？ 見せてくださいヨ」

「駄目だっ！ ヒナからのメールだぞ！ 俺へのラブレターなんだ、他人に見せられるわけないだろっ！」

スマホの画面を見ようとするヨーコから、朝哉は必死でガードした。

「チツ、トモヤはケチですネ。本当にケツの穴の小さい男ですヨ。それにラブレターの相手はオジサマで、トモヤじゃない」

「ヨーコ、専務に向かって失礼だぞ」

ヨーコと竹千代が睨み合う。

「今はプライベートタイムだからいいのデス。タケだつて、自分のボスがこんなイジケ野郎じゃ嫌でしょ？ 早いとこ解決しなきゃデスよ」

「そりゃあ俺だつて……だけど、これは俺たちが口出ししてどうにかなるものでもないし」

頭の上で繰り返されている二人のやりとりを、朝哉は『ごもつとも』……と思いつながら聞く。

朝哉にだつてわかっていた。これは自らが蒔いた種、自分自身で解決しなくてはならないことな

のだと。

あの時、無理にでもラウンジで雛子を掴まえて話をしてしまえばよかったのかもしれない。飛行機を降りた時に『実は俺が…』と言えば、こんな事態には陥^{おち}つていなかったはずだ。だけどそれをしていたら、やはり後悔していただろう…とも思う。

あしながおじさまの正体を知れば、雛子はもう朝哉を拒否できなくなる。いくら嫌いな相手であろうとも、雛子は心を殺して付き従うだろう。

彼女は六年間自分を援助してくれた人物をないがしろにできるような、そんな女性ではないのだ。——俺を好きになってもらうしかない。

要はそれに尽きるのだ。

雛子が敬愛しているあしながおじさまに値するに足りる人物。彼ならば…と思える人間に朝哉がなればいいだけのことだ。

今までは細い糸をどうにかつないで遠くから見守ることしかできなかった。

けれど今は、目の前で話すことができる。手を伸ばせば触れられる距離にいる。

六年前に自分が断ち切ってしまった関係を、もう一度取り戻すために——

「俺が動くしかないんだ」

もう一度好きになってもらう。そのためにやれることは全部しよう。

あきらめることができないのだから、進むしかない。

「よっしゃ！ ヨーコ、デートの服装はスーツがいいかな？」

勢いよく立ち上がった朝哉に、二人は笑顔でうなずく。

「トモヤ、ヒナコはアメリカではあっさりした食事を好んでましたヨ。ジェット・ラグで食欲がないかもしれないので日本食がいいデス。服装はスーツにしましょう。トモヤはヘタレですが顔はいいのですから、イケメンを見せつけるのデス」

「それじゃ俺は車を正面に…んっ？ 同じマンションだから、専務が部屋までお迎えに行くんですか？」

そう竹千代に聞かれたところで、朝哉は「駄目だ…」と低くうめいた。

実は朝哉が住んでいるのは雛子と同じマンションなのだ。

雛子が二十五階で朝哉は最上階。広さと階は違うものの、南向きの角部屋という位置も同じ。雛子に少しでも近くにいてほしいという朝哉の希望を叶えた結果、こうなったのだが…

「同じマンションというのはまだ内緒だ。ただでさえ、ヒナは引越しを考えているのに、俺が住んでいると知られたら、それこそ気持ち悪がられてドン引きされる。一旦車で表に出て、玄関で出迎えよう」

「了解です」

車を移動するために部屋を出た竹千代を見送っていると、ヨーコが朝哉を睨^{にら}み付けてきた。

「ご自分がドン引きされるコトをしている自覚はあるのですネ」

「…ああ、アリアリだ。ヒナにバレたら…それこそ本当に終わりだろうな」

「そうなる前にヒナコのハートをワニツカミしてくださいヨ」